

ビリギャル 小林さやかさんに聞く

— 日本語検定で自分の言葉を鍛える —

ビリギャル 小林さやかさん

■プロフィール

『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』（坪田信貴・著）の主人公。1988年3月生まれ、名古屋市出身。中学、高校で学年ビリを経験し、高2の夏に小学4年レベルの学力しかなかった。当時の全国模試の偏差値は30弱。塾講師、坪田信貴氏との出会いを機に、日本最難関レベルの私大、慶應義塾大学の現役合格を目指すことになる。結果、1年で偏差値を40上げて、複数の難関大学のほか、慶應義塾大学に現役で合格を果たした。現在は、ウェディングプランナーとして活躍し、2014年に結婚。



『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』
坪田信貴 著
KADOKAWA/アスキー・メディアワークス

成功者が持つ自己肯定感を 育てるのは大人の言葉

今は、偏差値ではなく、経験値の時代。学校での勉強だけではワクワクすることは見つけづらいのが現状です。圧倒的に批判されたギャル時代でしたが、いろんな人に出て話した経験は、お金では買えないもの。優等生だったら、学校行って、塾行って、家帰って、また学校行って、家と学校と塾だけの世界でした。ところが、家には帰らず街に出て、帰って来い！と言われても、嫌だー！と走って逃げる。街には、学歴社会の落伍者が大勢いましたが、学力で優劣を決める社会とは無縁の世界で、自分の強みを武器にトップの座に就いた人の姿を何人も目の当たりにしました。

友人の1人にナンバーワンキャバ嬢になった子もいました。努力なしにはナンバーワンは勝ち取れない現実を見せてくれました。慶大で出会った友人の中には何億円も稼ぐスーパービジネスマンもいます。どちらが正解ではなく、生き方はいろいろ。ただ、成功者に共通していたのが自己肯定力の強さです。もちろん、自己肯定力は自分一人では養えるものではありません。子どもの頃から、いかに周りの大人たちが、自分の存在を認めてくれたかによるところが大きい。大人たちのかける言葉の力が、子どもの自己肯定感を育てるのです。



さらに、小林さんは目標を達成するためには、自分の目標や夢を公言する“自己成就予言”も必要だと語気を強める。

慶大進学を目指し、勉強を始めた頃は、慶大が無理なら明治でもいいか、山ピー（山下智久さん）もいるし、ぐらゐの感覚でした。ところが、「私慶應行くんだ！」と言いふらしていた

ら高校中に噂が広まってしまつて。先生に呼び出されて「やめとけ」と言われたり、友人に笑われたり。ところが、受験することを知る人が増えるにつれ、“絶対、私慶大行きたい！！” という思いが強くなっていきました。あんなに言いまわっちゃったんだからもう慶大に行くしかない。いろんな人にもっと出会いたい。坪田先生みたいな人が大勢いるような場所で自分も過ごしたい。結果的には、こんなに努力しても行けないんだとしたら一体誰が行くんだろう？と思えるくらい努力しました。“自己成就予言”に背中を押されたようなものです。

“自己成就予言”は、能動的に取り組み、自分で考え、それを言葉にして誰かに伝えることが基本となる。さらに、社会人になれば、自己だけではなくチームとしての仕事における成就予言を求められる。仕事には、円滑にすすめるためのプレゼンテーション力やディスカッション力が必要とされるが、いずれも重要なのは伝える力。ところが、伝える手段となる自分の言葉を持っていない若者が多いことを、小林さんは危惧している。

日本語検定で 自分の言葉を鍛える

プレゼンテーションやディスカッションとなると、思いを込めた自分の言葉で、いかに相手の心を動かせるかがポイント。たとえば、絵を描きたい。絵で生計を立てるためには、描いた絵を買ってもらわなければならない。その絵をどんな場所で、どんな思いで描いたのか、心を打つストーリーがあるのか、すべてを言葉にして買い手に伝える。ただ伝えるだけではなく、どう伝えるのか。ここで、心に響く言葉の使い方、つまり日本語力が試されます。

ところが、今の若者が使っている言葉は、みんな同じ。失敗した、美味しい、素敵だ、嬉しい、

これらすべての表現として使う言葉が「やばい」。このひと言で若者同士は会話ができてしまいます。友人同士の会話なら、前後の会話の流れで、「これ、超やばくない」のひと言でも理解されるのですが、企業相手のプレゼンテーションの場で、「これは、超やばい商品です」と言ったところで何も伝わりません。受け手は、何が、どうやばいのか、どんな商品なのか、推測すらできない。これでは、自分が手掛けたい仕事があったとしても、関係者の心を動かし、形にすることなどできないのです。

中高生とネットなどを通じて会話する機会も多い中、小林さんが特に感じているのが、適切に自分の意思を伝えられる若者が少ないことだ。

圧倒的にボキャブラリーが少なく、若者言葉というかスラングだけで話すので、正しい会話として成立しないケースも多々あります。ネットのおかげで、昔より文字に触れる機会は多いと思いますが、ネットの日本語の質はピンキリ。若者がどんな記事やサイトを閲覧しているかにもよりますが、ネットだけでは日本語力に偏りが生じます。

だからこそ、日本語力の基礎を作る日本語検定を学んで語彙を増やし、日本語力を身につけることはとても重要。難しい言葉をたくさん覚える必要はなく、伝える手段としての日本語の幅を広げる。人間力も磨かれます。私も来年6月の日本語検定試験にチャレンジしますが、社会に出る前に身につけておきたかったと、今更ながらに思います。

小林さんが、日本語力を鍛えておくべきと痛感したのは社会人になってから。ウェディングプランナーの仕事に就いたが、正しい敬語が使えずに先輩に呆れられた苦い経験がある。とはいえ、お客さんの信頼を得ようと、日々の実践で学びながら、サービスマンとしての話し方を自分のものにした。昔は大人同士の会話から自然に学べた敬語。地域性や人付き合いが希薄になった今、残念ながら大人から学べる環境も少なくなっているのが現状だ。

「読む」「書く」「伝える」が 日本語力を磨く

敬語も、実践で学ぶ機会がないなら、自分で学ぶしかありません。ただ、やみくもに学ぶよりは、日本語検定で自分のレベルを認識するのも手。しっかり基礎固めをしてからレベルを上げていけば、かなりの敬語力が身につくと思います。また、5分でも10分でも本を読む習慣をつけてほしい。本を読めば、論理的思考力や文章力が養われます。今まさに、私自身が文章力を試されているのですが（笑い）。

実は、10月に面白い親子イベントを企画しています。共感して



くれる人の思いを込めたくて、資金調達にはクラウドファンディングを選びました。難しいのが、文字だけで相手の心を動かさなければならないこと。いかに面白そうなイベントか、出資する価値があるか、限られた文字数で表現する。文章が金額にも直結しますから、あれこれ頭を悩ませて考えている最中です。日本語力が鍛えられますね（笑い）。

親子、若者をターゲットにしたユニークなイベントや、斬新なアイデアを次々と実現している小林さん。果敢な挑戦の支えは、無謀な目標だとバカにされても一心不乱に努力して結果を出した高校時代の経験だ。当時、“社会に出たら君はこの経験を宝物のように感じると思うよ”と言ってくれた恩師の言葉こそ、今の小林さんの宝物だ。

小林さやかさん 最新情報

「元・ビリギャル」がつくる、ママを楽しむための学校。1 日限定開校。

◆URL <https://readyfor.jp/projects/birigal>

◆公開日 2017 年 8 月 21 日（月）

◆終了日 2017 年 10 月 10 日（火）

◆目標金額 300 万円

◆プロジェクトタイトル

「元・ビリギャル」がつくる、ママを楽しむための学校「渋谷でママ大学」1 日限定開校。

◆推しのリターン

- ・当日入場券やセミナー参加確約券
- ・当日夜開催の打ち上げ参加券
- ・ビリギャルの夫が経営する居酒屋@三軒茶屋でクラウドファンディング打ち上げパーティー参加券
- ・坪田塾特別授業をビリギャルと一緒に受講できる券

などなど、体験型リターン多数ご用意！

応援よろしくお願いします！！